記念誌「相中相高八十年」より
（大正期 その４）

４　寒稽古

柔道と剣道の寒稽古は毎年一月中旬から二月上旬にかけて講武道で行なわれた。この寒稽古には柔道部、剣道部の部員以外でも希望者はだれでも参加できた。期間は三週間（大正末期二週間）である。最終日には、寒稽古で鍛えた力と技を発揮すべく紅白試合が毎年行なわれ、終了後、例年豚飯（後には大福餅などになった）が出され、寄宿舎食堂で会食した。

「大正六年度武道部寒稽古成績」に依ると、大正三年度の出席者は 273 名（65%）、大正四年度は 252 名（65%）、大正五年度は 260 名（63%）、大正六年度は 244 名（62%）で、毎年六割以上の好出席率を示したのであった。この寒稽古に五カ年間無欠席で皆勤した者は毎年七、八名あり、この生徒達は卒業式には学校長より表彰された。

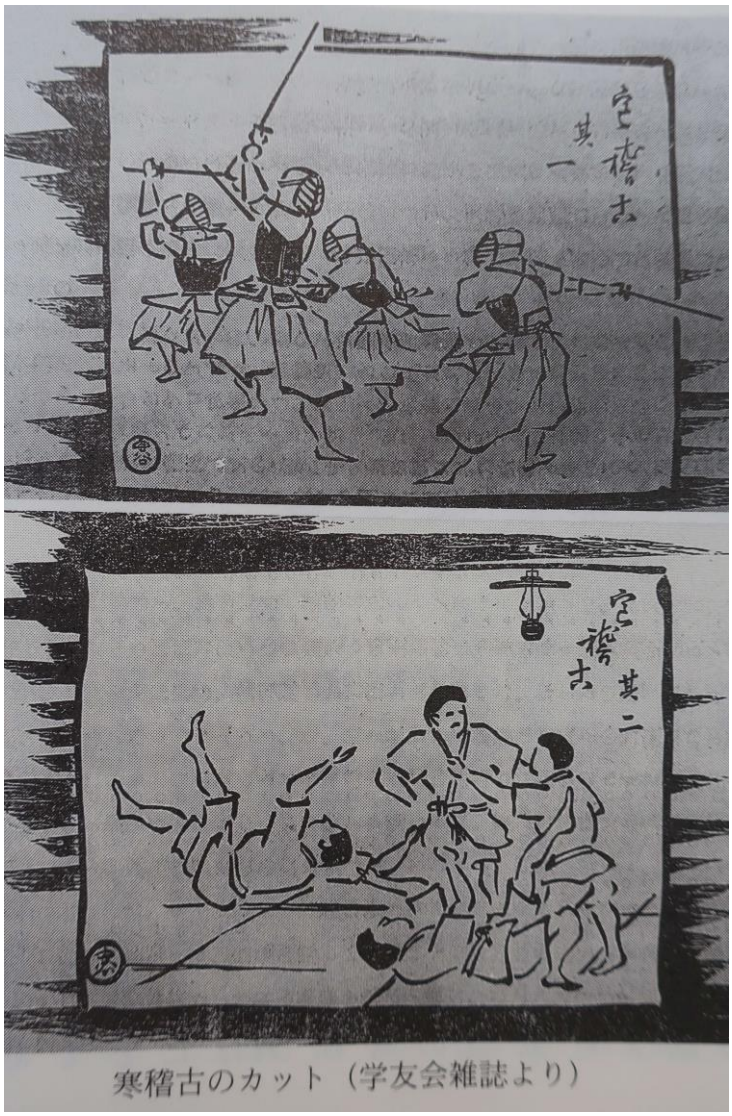
暗い中からあの板の間も畳も凍りつくような道場で、ひやりとする柔道着を着て、二、三本汗の流れ出るまでやれば、腹はペコペコだ。そこへでっかい茶碗で豚飯を何杯もかっこむ。あの時の飯の味あの匂い、終生忘れられない。　（相中第二十回生文集『中学時代』桑折重延[註1)]）

「剣道部報大正八年寒稽古」の中から抜粋して、大正期の相中寒稽古の模様を探って見よう。

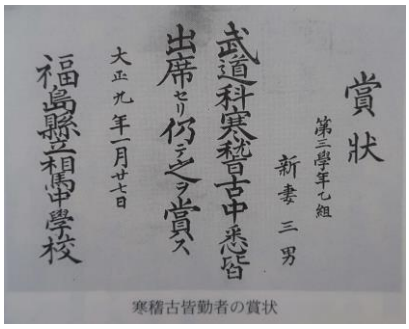
原釜の磯に鍛えたこの体この腕、寒風氷雪何するものぞ。……とこれこそが質実剛健を旨とする吾が相中五百の健児の意気である。鶏鳴と共に起き出でて、月光を踏み、肌をさす天明颪吹き荒ぶなか心胆を鍛へんとするのである。…

最早や四時五時と云ふ頃から暗闇の控所には元気のよい“お早う”の声が聞こえ、講武道の二つの電燈の下には、勇ましい竹刀の音や緊きしまった掛け声、又弾性に富んだ畳の音が聞えてくる。
やうやくにして床を抜け出して来た自分も、この周囲の活気に満ちた気分に自然と元気付いて、噤んだ口からは思はぬ大声で挨拶をしたりした。そして真暗な武道部室で手さぐりに面や胴や小手を付けて道場に入った。さすがに道具をつけると眠い事などすっかり忘れて、只手や足がつめたく痛いのを感ずるだけである。氷った様な板の間で二、三本稽古をすると、今度は手も足もポカポカ暖かになって来て呼吸が苦しくなる。その時に面を外すと頭からは蒸芋の様に白い湯気が立って朔風もかへって心地よく感ぜられる。

思へば去年もこんなにして知らず知らずの中に終ってしまったのである。今年は去年よりも志望者数が多いから、何うか成績良好に終ればよいと思って居る内に、不幸にも悪性感冒[註2)]が流行して来て欠席者が続出した。予定通りに三週間に終ることが困難になって来たので、一週間繰り上げて一月廿五日二週間で其の終りを告げねばならぬ様になってしまった。……



寒稽古のカット（学友会雑誌より）


賞状

第三學年乙組

新妻 三男

武道科寒稽古中悉皆出席セリ仍テ之ヲ賞ス

大正九年一月廿七日

福島縣立相馬中學校

寒稽古皆勤者の賞状

（註３）

（註１）八沢出身

（註２）スペイン風邪（1918～1920）と思われる。日本では３８万人が死亡したともいわれる。

（註３）中村出身

（９月 11 日　転記＆文責　村山）